

新井白石『蝦夷志』『南島志』ノート

原田 信男

1、日本の北と南

近年になって、中世日本の国家領域に関する研究が著しく進み、諸史料によって多少の相違はあるが、基本的には、“東(北)は外ヶ浜から西(南)は鬼界ヶ島まで”と認識されていたことが明らかにされている[大石 1980、村井 2013]。外ヶ浜とは、青森県津軽半島の陸奥湾に面する地域を指し、鬼界ヶ島とは、薩摩鬼界ヶ島とも称する鹿児島県三島村の硫黄島、もしくは同県喜界町の喜界島のこととされている。つまり中世においては、北海道も沖縄も日本ではなかったのである。

これは古代国家においても、北海道と沖縄が全くの異域であったことを意味する。むしろ律令国家の段階では、東北と九州も全てが支配領域ではありえず、北は青森県と岩手・山形県の北部、南は鹿児島県と熊本・宮崎県の南部には、十分に力が及んではいなかった。ただ、こうした地域にも人々が生活していたことは事実で、『蝦夷志』『南島志』の記述が示すように、大和に統一的な国家が登場すると、北と南の異域からも使者が来て、貢物を献じていたことが知られる。しかし北と南の実態については不明な点が多く、両書が紹介する正史類に見られる「蝦夷」や「流求」が、必ずしもそのまま北海道や沖縄を意味するわけではない点に留意しておく必要があるだろう。

ただ興味深いことに、現在の国家領域にあたる北海道と沖縄には、さらに歴史を遡れば、縄文系の土器が出土するという特色がある。より正確には、北はサハリン南部まで、逆に南は沖縄県先島諸島を除く沖縄本島まで、つまり現在の国家領域を、やや少し北にずらせた地域で、縄文系の土器が用いられていたことになる。しかし、こうした縄文系の土器が、等質な縄文文化の浸透を意味することにはならない。あくまでも縄文的な文様をもった土器が使われていただけで、南北3000キロメートルという緯度の違いがもたらす気候差、あるいは

それぞれの地形差を無視することはできない。

例えば沖縄の初源的な生活文化、つまり貝塚文化は、日本列島の縄文文化とは、かなり性格を異にする。沖縄の古い集落跡は、いわゆるイノーと呼ばれる珊瑚礁における漁業と海に面した小高い丘を生活基盤とするもので、山地が主要な面積を占める日本列島と生業体系が同じはずはない。北海道やサハリン南部にしても、日本列島の内地と呼ばれる地域とは気候的に全く異なる。この問題に関しては、縄文土器の形式論や用途論のさらなる展開を待たねばならないが、少なくとも北海道から沖縄までの日本列島を一様に論ずることはできまい。

しかし地域的な連続性は、歴史的な相互関係を間違いなくもたらし合う。とくに強力な国家を築いた社会が出現すると、周辺地域に大きな影響を及ぼし、時には戦争状態を惹き起こしたり、支配・被支配の関係を強いたりすることになる。巨視的にみれば、中国と日本は、そうした関係にあったし、日本と北海道・沖縄の関係もまた同様であった。とくに北海道を中心とするアイヌ民族は、国家を創らなかったし、沖縄における統一的な琉球王国の成立は15世紀前半のことであった。従って中世後期までは、北海道は異域、沖縄は異国だったのである。ただ人々の交流は別で、古代以来、盛んに往来し、とくに沖縄においては、和人と琉球人の混血も進んだ〔安里・土肥 2011〕。

やがて地方分権的であった日本の中世社会が終わりを告げ、全国統一を果たした豊臣秀吉は、明にまで攻め入ろうとして、まず朝鮮半島への侵略を開始した。結局、夢破れた秀吉の死後、その後を受けた江戸幕府は、明との国交回復を模索するが適わず、新たな日本的華夷秩序を求めて鎖国政策を採用するが、中国とはオランダとともに通商の国として交流を続けた。そして朝鮮と琉球は通交の国として、通信使や謝恩使・慶賀使が訪れた。

しかし現実には、琉球は薩摩藩の侵攻を受けて、奄美諸島を薩摩の直轄地とされ、琉球諸島は琉球王府領であったが、年貢の収奪に関する基本は薩摩が握っていた。また北海道については、松前藩が設けられ、蝦夷地はその直轄支配地とされた。ただ琉球王府は、いっぽうで中国との冊封関係にあったほか、蝦夷地もアイヌ人地と和人人地とが区別され、松前藩が支配したのは、後に「場所」と呼ばれる海岸線上の点に過ぎなかった。

つまりニュアンスは異なるが、ある意味で近世において、北海道と沖縄は、

それぞれ“半分”ずつ日本となった。そして明治の近代国家は、1869(明治2)年に開拓使を設置して北海道を、同じく1879(明治12)年に琉球処分によって沖縄を、ともに完全な日本領土としたのである。こうした南北二つの地は、かなり複雑な経緯を経て日本となったが、まさしく北海道と沖縄は、縄文のケースとは逆に弥生文化の伝わらない地域であった。

これは前近代における日本の歴史、いいかえれば国家の経済的基盤が、主に弥生以来の米に求められてきたことと密接に関係する。それまでの日本を米の世界とするなら、北海道と沖縄は肉の世界であったとも見なすことができる。いわば日本を挟んで北海道と沖縄は、米でなく肉の世界で、政治的にも相似的な歩みをたどったのである。『蝦夷志』『南島志』を考える上で、これは是非とも銘記されるべきことといえよう。

2、白石の立場と学問

新井白石は、明暦3(1657)年の生まれの儒学者で、享保10(1725)年の没。白石は号で、名を君美といい、幼名は与五郎、伝蔵・勘解由を通称とし、字は在中・済美を名乗った。先祖は上野国新田郡荒井郷(現・群馬県太田市新井町)の土豪で、祖父は常陸国下妻城主・多賀谷宣家に仕えた武士であった。しかし多賀谷氏の秋田移住後も、祖父は所領を失ったまま下妻に残った。その四男・正済が白石の父で、13歳の時に江戸に出て遍歴を続け、31歳の時にようやく上総国久留里藩主・土屋利直に仕えた。

白石も、初めは土屋利直、さらには堀田正俊に仕えたが、さまざま事情で浪人となった。長いこと独学を続けて来たが、30歳で木下順庵の門下となり、その推挙で37歳の時に甲府藩主・徳川綱豊の侍講となった。これが後に、白石の立場と学問の大きな転機となる。つまり綱豊が、宝永6(1709)年に、実子のなかった綱吉の後を嗣いで、第6代将軍・家宣となったことから、もともとの上司であった側用人・間部詮房を助けて、政治の中枢に位置し、さまざまな意見具申を行うところとなったのである。

このことが白石の学問形成に二つの特色を与えた。まず第一は、徳川將軍家を中心とした秩序体系に沿って、政治的な実学を志向しなければならなかったことである。そして第二には、幕府に備えられた膨大な蔵書群を閲覧し得たほ

か、立場上さまざまな人物からの見聞を得ることが可能となったことである。もともと白石は、該博な知識を有して実証性を重んじるとともに、膨大な情報を整序し、論理的に体系を組み上げていくという合理的思考に秀でていた。それが政治上の言わば特権的立場を得たことで、その学問の幅が広がり、よりいっそうの磨きがかかったとすべきだろう。

とくに第一の点については、正徳の治と呼ばれた幕政改革に関与し、経済政策では荻原重秀の貨幣改鑄を批判して、正徳金銀の発行を断行したほか、海舶互市新例を定めて金銀の流出を防ぐとともに、貿易を制限して商品作物の国産化を推進した。白石は、自らの調査に基づいた数値を基礎に、さまざまな計算を試みた上で、政策を立案した。また政治面では、綱吉の生類憐れみの令を廃止したほか、武家諸法度の改正にも着手したが、『蝦夷志』『南島志』とも関わる対外的施策としては、朝鮮通信使の待遇変更に注目すべきだろう。白石にとって、將軍と国家とがどのような存在であるかを、雄弁に物語るからである。

この待遇変更には二点あり、一つはその簡略化で、これは経費の節減を意図した。同じ木下順庵門下で、対馬藩に仕えていた雨森芳洲は猛反対したが、同時に経済政策を抱えていた白石にとっては、体面よりも内実を重んじて、何よりも和平と簡潔と平等を旨とした。そしてもう一つは、平等という観点とも関連するが、従来の將軍を「日本国大君」とする称号に異議があった。征夷大將軍という地位は国内でしか通用せず、大君は、中国では天子を意味し、日本では天皇を指すが、朝鮮では王子の嫡子の称にすぎない、というのが白石の理由であった。そこで天皇を名目的な「大君」として分離し、実質的には、足利義満の事例に倣って「日本国王」を、対外的な將軍の称号としたのである〔紙屋2009〕。

あくまでも白石にとっては、天皇の存在を認め敬意を払いながらも、自らが仕える徳川將軍家こそが、日本の実質的トップでなければならなかった。しかも儒学者らしく大義名分にこだわったところに白石の本領があった。しかし白石は、いっばうで合理主義的な思考を重んじるとともに、該博な知識と高い実証精神を有していた。

これらを駆使して、正徳2(1812)年に書き上げた通史『読史余論』は、もともと主君・徳川家宣への歴史進講を稿本としたもので、日本における「天下の

大勢』について史論風な論評を加えている。つまり公家中心であった古代国家が九変して、武家が政治の実権を握り、それが五変して今日に至ったという政治過程を論じたもので、徳川將軍家による政治支配の正当性を跡づけたところに大きな意義がある。

また同じく綱豊(家宣)の命を承けて編纂に着手した『藩翰譜』は、元禄13(1700)年から2年をかけた編纂事業で、徳川家を支える諸大名家337家の系譜を記した歴史書であった。これによって將軍家に奉公する家々の来歴と事績が公けにされ、幕府のヒエラルキーを支える歴史的根拠が体系化されたことになる。こうして白石は、歴史学を通じて徳川將軍家による政治支配の正当性と、これを支える臣下の秩序体系とを強化したのであり、その意味において彼の学問には、実証と論理に基づいた実学的側面が強かったといえよう。

そして地理学は、幕府の支配領域を正確に認識するとともに、広く世界情勢を把握して、国家の安定と繁栄を招くための基礎学であった。白石の世界地理開眼は、いうまでもなく白石が、立場上、江戸に護送されてきたイタリア人宣教師・シドッチを取り調べたことにある。以後、白石の眼は世界へと向けられるようになり、世界のなかの日本という観点を確実にしたことの意義は極めて大きかった。

3、『蝦夷志』『南島志』の諸本

『蝦夷志』(1巻本)、『南島志』(上下2巻本)は、それぞれ白石自身の序文によれば、前者が享保5(1720)年正月23日、後者が同4年12月20日で、年次からすれば『南島志』の方が早い。その差は年始を挟んでもわずか一ヶ月余のことで、実質的には、ほぼ同時に完成していたと見なすべきだろう。享保元(1716)年、白石は8代將軍吉宗の登場によって、幕閣を退かされており、ともに自由な身となった後の著述であった。すでに『采覧異言』と『西洋紀聞』は、解任以前に仕上がっており、その延長線上に位置する『蝦夷志』『南島志』は、世界を意識した上で、日本の南北認識を行った書であった。ただ白石のこれらの書物に関しては、叙述に客観性が高く、政策的な議論を展開してはいない点に留意すべきだろう。

両書の性格を論ずる前に、その諸本を見ておくこととしたい。現在、『蝦夷志』

『南島志』ともに白石の自筆稿本が伝わるが、諸般の事情により閲覧することはできなかった。また『南島志』に関しては、すでに自筆草稿本が栗田元次旧蔵書(栗田文庫)中にあることが、宮崎道生氏によって明らかにされている。同書は、長崎奉行・大岡清相書簡の紙背を利用したもので、引用文は漢文ながら、主文は漢文体の短文を交えた和文で綴っており、現行のものとは構成も異なる。すなわち地理・官職・冠服の部分を欠くが、「為朝の渡琉と舜天王」項が設けられ、その記述の詳しいことが指摘されている [宮崎 1988]。ただし同書は、現在のところ所在不明となっている。

ただ『蝦夷志』『南島志』の刊行は幕末のことで、それまで両書は、写本として書写され広く読まれていた。それゆえ書写による叢書類としては、①内閣文庫蔵「白石子」全9巻のうち第4巻、②宮内庁書陵部本「白石叢書」全17冊のうち第1・11冊、③内閣文庫本「白石叢書」全28冊のうち第18・21冊、④筑波大学図書館蔵曲亭蔵本滝沢文庫本「白石叢書」第17冊に収められているほか、『南島志』については、仙台藩天文方を務めた戸板保佑が編纂した「崇禎類書」のうち15冊・16冊に収められており、天理大学蔵となっているが、法政大学沖縄文化研究所蔵の複写版によれば、書名は『琉球志』となっている。

単独の写本については、それぞれ次のような所蔵あるいは旧蔵が確認される。まず『蝦夷志』は、『国書総目録』『古典籍総合目録』によれば、東京国立博物館・京都大学・神戸大学・東京大学・北海道大学・大阪府立図書館・都立中央図書館・宮城県立図書館・函館図書館・萩毛利家など計49本の存在が知られる。なお萩毛利家の蔵書は、現在、明治大学図書館にあり、同館には毛利家旧蔵の写本『蝦夷志』が2本現存するところから、計50本の写本が確認される。

また『南島志』の単独写本については、同様に、東京国立博物館・京都大学・慶応大学・国学院大学・東京大学・東北大学・大阪府立図書館・都立中央図書館・沖縄県立図書館・鹿児島大学・岩瀬文庫などに計40本が伝わることが知られる。また明治大学図書館に蘆田伊人旧蔵本、沖縄県立図書館には東恩納寛惇旧蔵本(寛政2年写)と横山重旧蔵本、琉球大学図書館には3冊本の写本と仲原善忠旧蔵本のほか、沖縄県宜野湾市立博物館に白石旧蔵本、ハワイ大学宝玲文庫には、白石旧蔵本、狩谷掖斎の手写書入本、迎暎閣旧蔵本(天明2年写)の3本があり、計49本の存在が確認される。

このうち『南島志』には、白石旧蔵の写本2本があるので、これについて触れておきたい。まずハワイ大学の宝玲文庫本は、上巻琉球二図の二カ所の内題の下にそれぞれ「玉縄」、下巻最終丁に「君美」「一字在中」の印がある。また宜野湾市立博物館本は、県内の古書肆から購入したもので、上巻には宝玲文庫本と同様に二カ所に「玉縄」の印があるほか、「教授館図書」の蔵書印もある。しかも宜野湾市立博物館本では、琉球図の書込み地名数が宝玲文庫本に比して多いが、上巻と下巻で書写人物が異なるようにも見える。ちなみに仲原善忠旧蔵本は、書写行数などから見て、同書から転写した可能性がある。

また『南島志』の刊本は、甘雨亭叢書全7集56冊のうちとして上梓され、弘化2(1845)年版・嘉永6(1853)年版・安政3(1856)年版がある。この叢書は、江戸期の著名学者の主要著作を収めたもので、上野国安中藩主板倉勝明の編になり、安中造士館の蔵版にかかる。

なお『蝦夷志』の版本は、蝦夷地の探検家・松浦武四郎が自著や蝦夷関係書などを出版した多気志楼蔵版のうちの一冊として刊行されている。文久2(1862)年の序文があり、これは瓠庵・栗本鯤すなわち栗本鋤雲の手になる。当時函館奉行組頭の任にあり、樺太探検中であつた鋤雲は、武四郎の依頼に答えて「唐太久春古丹之穴居」で序文を記したとしている。ちなみに『蝦夷志』『南島志』の活字本は、1906年刊の今泉定介編『新井白石全集』第3巻に収録されているほか、『蝦夷志』については、読み下し文が北方未公開古文書集成第1巻に収められている。

4. 『蝦夷志』の構成と特色

『蝦夷志』の構成を刊本の場合で見れば、栗本鋤雲の序2丁を含み全丁数は16丁で、各丁は9行で各行20字となっているが、割注が非常に多い。目次は、「蝦夷志序／蝦夷地図説／蝦夷／北蝦夷（即奥蝦夷夷中呼之曰カラト）／東北諸夷」の順となっている。また『蝦夷志』の付図については、多気志楼蔵版では、「蝦夷志序」と「蝦夷地図説」の間に、見開き1丁で「北海道十二ヶ国畧図」（国後・択捉をはじめとする千島列島と樺太を含む）のみが掲載されている。しかし、これは題名からも明らかなように、後に松浦武四郎が付したものである。

もともと『蝦夷志』写本には、アイヌ民族のいくつかの器物および人物の図

に解説を付したものと、津軽・下北および北海道南部の図とが、巻末に掲載されているものがあるが、一方もしくは双方を欠くものも少なくない。器物および人物図には、半弓・毒矢・矢筒・刀・鞘・マキリ・筭・鞘・太刀・クワサキ・懸刀・シヨキネ棒・スツウチ棒・シトキ(首飾り)・ハヨケベ(具足)・男女(夫婦)・袖縁木綿・中国風衣服(男女)・銚子・椀・イクパスイ(酒棒篋)が、見開きで9丁半に描かれている。また地図は見開き1丁で、ともに彩色が施されている。なお林子平の『三国通覧図説』は、その多くを『蝦夷志』に負っているが、この器物・人物図についても、そのまま同書の一部に利用している。

次に『蝦夷志』の内容について見れば、「蝦夷志序」では蝦夷との歴史概略が述べられ、続いて「蝦夷地図説」に蝦夷地の地理が記される。本論にあたる「蝦夷」では、蝦夷地の内実が描かれ、各地域ごとのコタン名が列挙されるほか、アイヌ民族の習俗や武器・生業・物産などが記され、義経伝説に関する記載もある。また「北蝦夷」ではカラフトのコタン名や地形・風俗を概観し、「東北諸夷」でもオホーツク海地域のほぼ同様な記述が続く。

そして『蝦夷志』の特色としては、『南島志』と較べてかなり短く、原稿量は半分未満に満たない点が注目される。これは当時における蝦夷地の情報量が、琉球に較べて圧倒的に少なかったことに由来する。蝦夷地が異国ではなく異域であり、しかも先住民であるアイヌ民族が文字を持たず記録を有しなかったためである。これに加えて、アジアの盟主である中国との関係が、山丹貿易に留まる私的なもので、国家が存在しなかったために、中国の歴史書・地理書類にも、その記述が登場しないことに因る。

もちろん松前藩の設置もあり、コタンつまり集落に関しては、正保元(1644)年と元禄13(1700)年の郷帳および国絵図など、幕府の把握は行われていたが、海岸部を中心とするものでしかなかった。また白石以前においては、蝦夷地関係書の比較的まとまった著述としては、宝永7(1710)年の跋を有する松宮観山の『蝦夷談筆記』上下巻と『蝦夷島記』くらいしかなかった。

前者は、松前にあった観山が、蝦夷通詞からの談話を筆記したもので、上巻に松前蝦夷地の様子と物産やアイヌ語の単語あるいは松前家系を収め、下巻ではシャクシャインの乱の顛末を記している。また後者は17世紀中期頃に巡見使一行の一人が蝦夷地の様相を記したもので、共に短なものにすぎない。なお、

さすがにシャクシャインの乱に関しては、いくつかまとまったものはあるが、『蝦夷志』の叙述には反映されていない。

むしろ白石は、寛永21年(1644)に起きた越前国坂井郡新保村の商船が漂流して韃靼に至った事件に興味を抱き、これを書写して本書の一部に活用している。なお早い時期に蝦夷地への関心を持った人物に、水戸光圈がいるが、一般に広く蝦夷地が人々の興味の対象となるのは、宝暦～天明期以降のことであった。これは田沼政治における貨幣経済の重視によって、蝦夷地の開発に力が注がれたため、これ以降、実に多くの人々が蝦夷地を訪れ、さまざまな記録を残すようになった。それゆえ小冊子ながら『蝦夷志』は、成立当時において、最初のもっとも体系的な著作であったと評価することができる。

5、『南島志』の構成と特色

次に『南島志』は上下2巻の構成となっている。同様に丁数を刊本の場合で見れば、上巻24丁・下巻18丁の計42丁で、各丁は9行で各行21字となっているが、『蝦夷志』同様に割注が非常に多い。そして目次は、「南島志総序／南島志目録／地理第一／世系第二(以上、上巻)／官職第三／宮室第四／冠服第五／礼刑第六／文芸第七／風俗第八／食貨第九／物産第十(以上、下巻)」という構成となっている。

また『南島志』付図冒頭に「琉球国全図」として薩摩から与那国島までが見開き3丁半で鳥瞰的に描かれ、航路が朱線で結ばれて、島名や主な港名が記されている。続いて「琉球各島図」があり、大島・徳島・沖縄島・宮古島・八重山島が見開き3丁に単色で描かれ、間切名や村名が丁寧に記入されている。ただし甘雨亭叢書の刊本には2図とも省かれている。『蝦夷志』も幕府所蔵の国絵図・郷帳類を参照にしたものと思われるが、『南島志』では、より詳細に、島々の形や港名・航路および間切名・村名が記されている。

さらに『南島志』の内容に関しては、全体で『蝦夷志』の三倍近い分量に及び、とくに総序を含むとはいえ、「地理」「世系」の二章からなる上巻に、多くの丁数が費やされている。つまり琉球の地理的状況と王朝の歴史に、『南島志』の大半がさかされたことになる。冒頭の総序は、琉球史の概略で、中国と日本の史書にどう見えるのかを説き起こし、琉球という語の実態に触れている。

そして本論の「地理」では、琉球の位置関係を明らかにし、沖縄島およびその周辺の9島を古中山とし、与論島から大島・喜界島までの5島を古山北、さらに周辺諸島を含む宮古島・八重山島の2島を古山南として、周廻や港の大きさなどを克明に記している。これを承けて「世系」では、先ず日本・中国との歴史的関係を記した上で、源為朝から筆を起こし、その子と伝える舜天王以降の王統の歴史を、紀伝体で簡潔に綴っている。

続いて下巻に移ると、「官職」で王府の位階や役職に関する情報を示し、「宮室」では王宮の様子を記して官民の屋舎にも触れ、「冠服」では王や官吏の服制を述べる。また「礼刑」で王府の儀式や礼楽および刑典を紹介し、「文芸」では初めは文字が無かったが中国の大学に留学生を送って学ばせたといい、「風俗」では男女の身なりや信仰などに触れ、伊勢や八幡・熊野を勧請した神社のほか禅寺があることを記している。さらに「食貨」では農業や商業の状況および中国との交易について述べ、酒や茶・甘藷・香などにも眼を向け、最後の「物産」では中国との貿易品を列挙した上で、山海の動植物などを記述している。

何よりも『南島志』の特色としては、『蝦夷志』に較べて記録に恵まれていたことから、より詳細な記述が可能だった点にある。すでに日本にも僧・袋中の手になる『琉球神道記』があったが、嘉慶21(慶安3=1650)年には、向象賢によって初めての正史『中山世鑑』が完成していた。また古くから琉球は、中国の史書類に海上の要所として登場し、とくに明代以降においては、中国との冊封関係を結んで朝貢を行っていたため、中国側の記録に詳しく留められていたことなどが有利に働いた。

もちろん中国側の史料が絶対であるはずもなく、白石は実証主義的態度から、さまざまな疑義を呈しつつ、これらに批判的な検討を加えている。その判断の一つの大きな根拠となったのは、將軍の代替わりに派遣された琉球使節との直接対話であり、これに関しては『白石先生琉人問対』が残されている[宮崎1973]。まさに、これは幕府外交に深く関与した白石の立場を最大限に利用したもので、琉球王府のトップレベルの知識人から精度の高い情報が得られた。それゆえ最も体系的で緻密な琉球の地誌を作成することができたのである。

ただ白石の三山に対する理解には、大きな誤りがある。それは「地理」の部における三山の区分で、先に見たように、奄美諸島を古山北、先島諸島を古山

南とした点である。琉球使節の意見を聞きながらも、自ら判断を下し、あくまでも推測としているが、その論拠は、北山・南山とも本島の南北では余りに領土が狭く、国家として成り立たないというものであった。幕府の国家財政問題に苦しんだ白石ではあったが、国家の経済的基盤を、耕地の広狭に求めるような石高制的な発想に、大きな落とし穴があったものと思われる。

ちなみに毛利文庫所蔵の写本『南島志』を作成した藤原明達こと幕臣の真野正明は、同書総序の後に、清の徐葆光が『中山伝信録』を著したのは、『南島志』完成の2年後であったことを特記している。まさに軌を一にして1720年代に、日中両国で精緻な琉球地誌が出現をみたことは、確かに注目に値しよう。なお白石は、『南島志』脱稿後に、その簡略版ともいべき『琉球国事略』を和文で著し、後に『五事略』に収めている。

ところで白石の学問を敬愛した滝沢馬琴は、先にも述べたように、その著作を集めて白石叢書を完成させたが、なかでも『南島志』には格別な興味を抱いていたように思われる。琉球使節来聘との関係もあって、当時には一種の琉球ブームが巻き起こっていた。すでに寛政2(1790)年には、森島中良の『琉球談』も出版されているが、これは『中山伝信録』からの借用にすぎない。こうした現象に便乗したきらいはあるが、文化4(1807)年から馬琴は、まさに為朝を主人公とした『椿説弓張月』の刊行を開始した。全5巻におよぶ4年の歳月をかけた大作は、琉球史を背景にした壮大な物語で、その豊富な知識は『南島志』に学んだと見て間違いはない。

ちなみに草稿本『南島志』や『琉球国事略』が和文であったように、白石自身はあまり漢文は得意ではなかったという。それを敢えて『蝦夷志』と『南島志』を漢文で綴った背景には、対外的にも通用する書物としたいという意識があったものと思われる。なお、後の『南島志』を承けた仕事としては、明治10(1877)年に、旧鹿兒島藩士・伊地知貞馨が刊行した『沖繩志』がある。

6、白石の南北認識

そもそも白石が両書の執筆を意図した動機は、いち早く海外情勢を認識し、すでに『采覧異言』や『西洋紀聞』を完成させたことにある。少しばかり世界の情勢が見えてきたにも関わらず、日本の南北に対しては、不明なことのほう

が多かった。将軍・家宣の下で、長崎貿易に関する建議を行い、イタリア人シドッチの取調べを行った宝永6(1709)年に、白石は琉球国への復書草案を起しており、朝鮮聘礼が問題となった翌年にも同じく復書の草案の筆を執っている〔宮崎 1958〕。

おそらく白石は、復書の構想を練りつつ、琉球国の詳細を知り得ないもどかしさを感じており、その対極に位置する蝦夷地についても同様の思いがあっただろう。白石は韃靼に対して格別な脅威を抱いていたこと、すでに先学によって指摘されているが〔宮崎 1988〕、それが直接の契機ではなくとも、蝦夷地・琉球国に関する知識の欠如は、白石にとって致命的なものと感じていたはずである。もちろん白石は、幕閣の中枢にあった時から、この問題を考え、さまざまな情報の入手に努めていた。それは『南島志』を書くためというより、琉球の正確な情報を把握したいがため、それが退職後に時間的余裕ができた段階で、二つの著作として結実したものであった。

また蝦夷地に関しても、享保2(1717)年7月2日付の小瀬復庵宛書簡(全集5)で、「一、蝦夷凶の事、委曲承知、入御念候御事に奉存候」と見え、翌3年6月22日付の小瀬復庵宛書簡(全集5)に「一、蝦夷人物凶の事……此凶もさるかたに有之候を懇望いたし借り得候ものにて候間、御うつし候共、御秘蔵被成沙汰無之様に奉頼候、公義にも無之故、文昭席(家宣)御代に此凶を御うつさせ被成候き……此外此地方の事も考を可致と存じ、年々承合せ書あつめ候ものども候、いまだ草をも起さず候……来年迄のうちには蝦夷考琉球考なども仕りたて候事も可有之候歟」とあり、その間の事情が窺われる。

白石の南北認識について、『蝦夷志』『南島志』の記述からは、まず7世紀に成立した古代国家との関係が重視され、いつ蝦夷と琉球から朝貢があったか、反乱や討伐が行われたかに関心が寄せられている。これは18世紀初頭のこととはいえ、日本という国家の頂点に位置した白石の立場としては当然の態度であった。つまり国家の初源において、南北の地が日本に服していたことを、江戸幕府を支えた歴史家としても、白石は確認しておく必要を感じていたのである。

そして白石が南北の歴史を叙述するなかで、最も注目したのは、北の義経伝説と南の為朝伝説であった。まず義経伝説については『蝦夷志』に「俗に尤も

神を敬ふは、而も祠壇を設けず、其の飲食に祭る所の者は、源の廷尉義経なり」と記し、義経が住したという遺跡があり、弁慶崎という地名が残ることなどを挙げている。さらに先に述べた越前漂流民に関して、彼らが日本に戻る途中に燕京(北京)に立ち寄ったところ、そこで清の太祖であるヌルハチの肖像を見たが、これが義経に似ているという話を書き留めている。これは後の義経=ジンギスカン説の源流となるが、そもそも義経の肖像画が実物に近いかどうかは難しい問題で、批判的実証精神に富んだ白石らしからぬ発言というほかはない。

またアイヌの人々が、義経を祭るというのは、伝説上の英雄・オキクルミを、アイヌ語通詞たちが義経と翻訳したからにすぎない。しかもオキクルミには、サマユンクルという従者がいることから、これを弁慶と訳してアイヌの人々の間に義経伝説があるという話が出来上がってしまった。ちなみに弁慶崎は、パンケザキの転訛で割れ目のある岬の意にすぎず、これも我田引水とすべきだろう。白石は、この義経に関する話を、あくまでも「異聞」と記して客観性を装ってはいるが、何ら疑義を挟むわけでもなく、むしろ暗黙の了承を与えて済ませているかの如くである。

また為朝伝説に関しては、『南島志』『世系』では、神話的王である天孫氏に触れながらも、実際の王統としては舜天王から記述が始まる。そして舜天王に関しては、『中山世系図』(『中山世鑑』)や『保元記事』(『保元物語』)に拠りつつ、「是れ(舜天即位)に先だちて保元の乱あり。故に將軍源朝臣義家の孫廷尉為義、その子為朝伊豆州のに竄る。平氏権をほ擯しままにするに及び……遂に南島に至る……(為朝は八丈島に帰り軍兵に責められて自殺したが)遺(遺児)孤ひとりり南中に在る有りて、母は大里按司妹なり……長ずるに及び衆推して浦添按司と為る……按司の年は二十二、乃ち其の衆を率しひ……乱を清める。挙国して尊称し、以て王と為す。舜天王是なり」と記し、ほとんど史実と見なしている。

この為朝伝説に関しては、かつて日琉同祖論との関係で、その真偽をめぐってさまざまな議論が展開されたが、今日では、あくまでも伝承にすぎないとされている。つまり為朝が舜天王の父であるとする史料的根拠は存在せず、むしろ舜天王の存在すらも問題視されている [宮城 1975]。しかし白石の眼には、この物語は一つの事実として映り、義経伝説同様に批判的考察を加えることなしに、彼は淡々と記述を続けたのである。

実は為朝の曾祖父・義家は、白石が仕えた徳川家の始祖・新田義重の祖父にあたり、白石の祖先もまた新田氏が支配した上野国新田郡荒井郷を出自とする武士であった。この系譜の問題は、源氏の流れをくむ義経についても同様に当て嵌まるが、これに関する主観的な記述は一切行っていない。しかし白石にとって、義経伝説と為朝伝説は、松前藩が蝦夷地を、そして薩摩藩が琉球国を、つまり両地域とも江戸幕府が支配することの正統性を暗黙のうちに物語るものでしかなかった。

つまり蝦夷地と琉球国は、古代国家への服属の意を示し、中世には武家すなわち源氏による支配が及んだ地であり、それは日本の一部だと白石は確信していたことになる。さらに、こうした認識は白石が好んで用いようとした北倭・南倭という語法に象徴される。もともと『蝦夷志』『南島志』は、白石にとって『北倭志』『南倭志』と位置づけられていた。このことは享保7(1722)年12月19日付の安積澹泊宛書簡追記(全集5)に「琉球を南倭と申候事は山海経の南北倭の事に付、先年南北倭志を撰述候事候」と記していることから明らかである。

これに関して白石は、『蝦夷志』に「蝦夷は、一に毛人と曰ひ、古への北倭なり」と記し、『南島志』でも「按ずるに、流求古へは南倭なり」という推論を行っているが、これは白石の深層心理が招いた『山海経』の誤読である。すなわち同書第12海内北経に「蓋国在鉅燕南倭北倭属燕」とあるのを、白石は「蓋国は鉅燕にあり。南倭、北倭は燕に属す」と読んだ。これは元禄6(1693)年に松下見林が刊行した『異称日本伝』の訓読を承けたものであるが、白石には蝦夷地と琉球とが、古来日本の一部であったという確信に似た認識があった。もちろん『山海経』の史料価値の低さを知りつつも、白石は「南倭、北倭」と読み、それを歴史的事実と見なしていたのである。

しかし後に屋代弘賢が、寛政9(1797)年3月11日、桑山左衛門へ宛てた「琉球状」なる長い書簡のなかで、水戸彰考館総裁・立原伯時の助言を得て「此句読まさしく異称日本伝にて誤られ候か、見林白石共に龕漏なる事にて候き、今本書を見候へは、第十二海内北経にて御座候、此次に朝鮮ハ在列陽ノ東海北山南二列陽ハ属燕と有之、此両條を併考候て、句読の誤は不可有事と被存候」と記したように、明らかな白石の読み間違いであった。

なお、これに関しては、両者を倭文化を共有する地域と見なして、白石には倭文化圏構想があったとする見解がある〔横山 1987〕。しかし白石は、琉球に関しては同じ言語を使用する地域と見なしていたが、蝦夷地に関しては文化の同質性を強調してはならず、松前藩による支配の実態を認めていただけて、蝦夷地については倭文化構想が当て嵌まらない。やはり白石には、両地域は日本国家の枠組みのうちに収まるもので、幕府支配の正統性を強調する意図が働いていたとする方が正しいだろう。

なお両書とも版本が刊行されたのは、近世後期のことであるが、それ以前にかなりの数の写本が出回っており、とくに版本も含めて、いくつかの大名家に伝来したことに注目すべきであろう。また当時の学者たちの多くが両書を所有しており、屋代弘賢以外にも、両書の内容に対する批判的検討が行われていたことも明らかにされている〔宮崎 1976〕。

基本的に蝦夷地と琉球国は、幕藩体制下でも例外的な支配方式が採られたところで、まさに異域・異国と呼ぶにふさわしい性格を有しており、多くの藩が南北両極の地に興味を抱いていたことが窺われる。いずれにしても『蝦夷志』『南島志』は、当時において最もまとまった両地域に関する著作であり、白石以外の人物には真似のできない仕事でもあった。それゆえ数多くの知識人たちが、両書の写本や版本によって、蝦夷地や琉球国の知識を得ようとしていたのである。

【参考文献】

- 安里進・土肥直美 2012 『沖縄人はどこから来たか』 ボーダーインク新書
大石直正 1980 「外が浜・夷島考」『関晃先生還暦記念日本古代史研究』所収 吉川弘文館
紙屋敦之 2009 『歴史のはざまを読む』 榕樹社
黒田秀俊 1979 「蝦夷の認識を確立した先蹤書」『蝦夷志』北方未公開古文書集成 叢文社
宮城栄昌 1975 「沖繩歴史に対する疑問」『南島史学』6号
宮崎道生 1958 『新井白石の研究』 吉川弘文館
宮崎道生 1973 『新井白石の洋学と海外知識』 吉川弘文館
宮崎道生 1988 『新井白石の史学と地理学』 吉川弘文館
村井章介 2013 『日本中世境界史論』 岩波書店
横山 学 1987 『琉球国使節渡来の研究』 吉川弘文館

(はらだ のぶお)